

現代短歌分類辭典

第四十一卷

津 端 修 編 纂

津 端 修 編 纂

現代短歌分類辞典

第四十一卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辞典

41

昭和五十二年七月十五日発行 定価一、六〇〇円

著者発行
兼印刷者

津
端
修

T 164

東京都中野区上高田二丁目九の一六

発行所

津
端
修

振替 東京 六七三四一番
電話 三八七局八四二九番

目

次

(第四十一卷)

	歌数	頁数		歌数	頁数
あら—ぬ	一〇九	一	あら—ぬ—や	六	一〇五
あらぬ	九六	三	あら—ぬ—らし	五	一〇六
あら—ぬ—がに	三	一〇〇	あら—ぬ—らしき	一	〃
あらぬげに	一	〃	あら—ね	二五	〃
あら—ぬ—ごとし	一	〃	あら—ね—ど	一三	二七
眩野中(あらぬなか)	一	一〇二	あら—ね—ども	一六	三〇
あら—ぬ—なら—ん	一	〃	あら—ね—ば	一四	三〇
あら—ぬ—なり	二七	〃	あら—ね—ばや	一	二九
あら—ぬ—なり—けり	二	一〇三	眩野(あらぬ)	一三	〃
あらぬのふすま	一	〃	荒野風	一	二五
眩野原(あらぬはら)	七	一〇四	眩野黍畑	一	〃
あら—ぬ—べか—らし	一	〃	荒鋸	一	〃
あら—ぬ—べし	一	一〇五	荒野さび—すれ—や	一	〃
荒沼	一	〃	荒野さぶ	一	〃

洗はーねーば	一	三六
あらはの	一八	〃
あらは灯	一	三七
荒浜	九	〃
アラバマ	二	四八
洗はーむ (終止形)	一六	四九
同 (連体形)	六	五〇
荒ばーむ	一	五一
洗はーむーよ	一	〃
あらーばーやはーか	一六	〃
あらーばやは	一	五二
あらは山肌	一	〃
あらーばーよ	二	五三
荒原	三	〃
現はる	一三四	〃
合計	五、三二	〃

あら—ぬ【動詞・助動詞】

君あらぬ君が書斎に恣に引きいだしたる書よみはじむ③

村田利明

君あらぬ今日の棧敷のさびしさは知らぬ他国に來しこちする⑥

吉井勇

君あらぬ心の塔はかたむきて夕の空にさびしくも立つ①

関戸信次

王あらぬ御座なりながら朝には掃きか清むるきよくして寂し

植松寿樹

君あらぬさびしき庭の大いなる松の根がたに白き菊さく

平山修

君あらぬ渋谷ずまひは二月も経たぬにはやも倦みにけらしな②

吉井勇

君あらぬ野中の家の脇庭に噴井は満ちて溢れやまなく③

佐野四郎

君あらぬ部屋にさす日のうらさみし笹葉のゆれをみつつ坐りぬ③

松田常憲

君あらぬ部屋に坐りゐておちつきがたし机の位置はありしままにせむ③

松田常憲

君あらぬ部屋のさびしさ、花室の花ことごとく散りし思す③

佐佐木信綱

君あらぬ窓にさやりて楓の翅実紅差す三回忌今日は③

佐野四郎

あら—ぬ

あらぬ

きみあらぬ邸は庭の木深きに黄金なす実のこの大ききよ③

君が炊きし飯をくひつつ炊くことも長くはあらぬうれしさを知る①

君がためおのがふがひのあらぬをば責めたるはてのやるせなさはや①

君知らん灯台守よさびしさのはてに光れる世界あらぬか⑭

きみとわれ岩城七浜をゆきゆけどはてしもあらぬ道なりにける

君亡しと何の伝^{つて}ごと死にたるは恐らく今日の我にはあらぬか⑨

君に逢ひ何をかたりし何を見し夢のなかなる夢にやはあらぬ⑨

君のため国のためなる戦^{いくさ}争にはあらぬ戦争も史には多し⑨

君一人えたる重荷にたえぬやう心ぞふるふ信あらぬ日を②

君を問はれやさやさしさはまたあらぬ人かと云ひぬふかく思はず

饗宴にあらぬひとりの卓の上光あつめてデリシャスがあり⑤

行儀よきはた美しき衣裳ありて人生のあらぬ彼と彼女と⑪

山下秀之助

中島哀涙

富田碎花

與謝野寛

細井魚袋

與謝野寛

吉井勇

川田順

前田夕暮

與謝野晶子

朝吹磯子

吉植庄亮

客あらぬ旅籠の早き夜のしづみ灯にまともなる軸もすわれり

窮乏の果てに死にきと伝え来つ想ひ出清くあらぬその貌①

清水へ三年坂をのぼるとき手を取りし君にやはあらぬ⑭

ぎらぎらと眼するどき自らをたのみ一日もやすくあらぬかも②

霧立ちて久しくあらぬに九十九谷谷は埋まる霧の底ひに③

きれぎれの夢なりしかなまとまりのあらぬわが過去そのままして①

禁断の果にはあらぬよろし果と娘は笑みて食ふその甘美果を①

悔あらぬ為事はなきと思ひつつ二階に上り来て歩みをり

悔あらぬ半切書かむ吾がねがひ遂に空しく煙草吸ひつぐ⑦

茎立ちのいづれを見ても咲きそめて幾日もあらぬ油菜の花④

草いきれするなかにしてうなだれし女につぐべき言葉あらぬかな③

草がくりあざみ咲く日となりにけり思ひいづべき人もあらぬに

あらぬ

東郷久義

岩上とわ子

吉井勇

齋藤喜博

半田良平

松井如流

岡本大無

糸永蟻子

菊池知勇

菊池知勇

田村飛鳥

立木いち子

あらぬ

くしけづるいとまもあらぬわれの髪乱れ乱れて春吹くゆふべ

樟の木も河原逢も見さかひのあらぬ強風の打つ湯本かな²⁸

薬などなきもよからむいたづきにあらぬいたみを身におぼゆなり⁴

薬にほふ中庭先を晩秋の南天さむく実づきてあらぬ¹

くだつ夜の果てしもあらぬもの思ひ思ひ尽きなばわれは死ぬべし¹⁷

降るより機能のあらぬ落下傘今し降りけり弾幕の中に¹

口癖になりたるものかわが病かかはりあらぬ人にも言ひつ¹⁴

口づけを憎むにあらぬあかしをばことさらにしも見せたまふかな⁸

靴はきて鋪道をわれの歩みをり土には帰ることあらぬごと

くつわ虫の声すでにあらぬ高原に雲微塵なき月照りわたる²

国汚す奴あらばと太刀抜^なて仇にもあらぬ壁に物いふ

鍬形も鋌もあらぬくろがねの兜^{はち}頂は残りて国つ宝ぞ¹⁴

大野 誠 夫

與謝野 晶子

尾上 柴舟

川浪 磐根

吉井 勇

千代 国一

尾上 柴舟

與謝野 晶子

久保 方丈

谷 鼎

橘 曙 覧

川田 順

くび青くかがやく鳩が窓に居り君に言ふべき言葉あらぬに

雲あらぬ秋の夕べの空ふかくこころ吸はれてもどきたる部屋④

雲あらぬけふのひかりの漲りて蒼海原のかがよひにけり④

雲あらぬ空にうかびて蝶が岳つばくらが岳雪にましろき⑥

雲あらぬ空の明るく青桐の黄に枯れし葉の枝に光りたり⑪

雲あらぬ空の真青し崖の上の紅葉の細枝ふとしも揺れぬ⑩

雲影もあらぬ真昼にひろごれる広場の砂の眼に痛しもよ⑥

雲一つあらぬみ空にたたずみて恐ろしきまで澄み透る月⑬

雲もあらぬ秋の国なる高原に旅びとなれば涙ながれき①

曇りつつ雨とはならぬ一日の時のあらぬがごときゆたけさ③

曇るとにあらぬ今宵の月かげの朧に見えて白き花かも⑤

雲を見て誰れともあらぬ文の欲し秋のさせつる心なるべし①

あら—ぬ

小暮政次

谷鼎

進藤恵美子

窪田空穂

窪田空穂

窪田空穂

尾上柴舟

尾上柴舟

富田碎花

谷鼎

太田水穂

近江満子

あらぬ

- くらやみに向ひてわれは目を開きぬ限もあらぬものの寂けさ③
 繰りかへし読めれどあらぬ友の名をさびしみにつつ朝餉を食すも
 厨にて林檎をおろし居る妻を覗きに來つつ術はあらぬかも③
 狂ほしき君がいぶきをかづきたるわが黒髪も昔にはあらぬ④
 暮れかかる空につめたくにほひゐてそくばくあらぬ梅の花咲けり①
 くれなるの灯ひとつともる祭壇に向きて祈らん人あらぬみ堂④
 黒髪は少女のごとく匂へどもさあらぬ君が眸のおとろへ①
 クロールをまねべる曰井つと立ちて慌てたる顔に眼鏡のあらぬ⑬
 菓子あらぬ茶の詮なやとこの翁わがすすむるに打笑ひつも⑬
 果樹園の一部を割きて我が国の林檎生らする人はあらぬ⑬
 慣習の異なる民と住むからにたやすく見する怒にあらぬ②
 薫じたる香のけぶりの一筋に思ひ断ちにし此世にやあらぬ①

斎藤茂吉	西村孝	山下陸奥	矢沢孝子	野村清	村田利明	百田楓花	窪田空穂	窪田空穂	窪田空穂	相良義重	佐佐木信綱
------	-----	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	-------

訓練にあらぬ空襲警報の初めて鳴りつ空にひびきて⑤

境内は立つ木もあらぬ明るさに青みどろ生ふる池に添ひ行く①

痙攣とめむ術のあらぬか鍼注射鎮痛剤と立て続けるを②

けさの朝明のいまの時までねがひたる人のいのちのはやもあらぬか①

今朝は火の燃えつき悪きにいらだちぬ敢へてせかるる生活にあらぬを①

今朝よりは乙女にあらぬ汝が姿欄干に見出で肩に手を置く②

今日すでに昨日にあらぬ幼子のもの壊しつつところ育つを②

今日となれば都のうちに残り去る千櫓を待めり然かにはあらぬか③

業につかれとがる心の意地わろくなりなりつつすべのあらぬかも

今日もなく昨日もあらぬ夢殿の扉によりぬ老を知らぬ子②

今日もまた夕べとなりぬ独りゐる幾時もあらぬ音たてはじむ②

けふわかれて生くるもかひのあらぬ日のをはり知られずづくがごとし①富田碎花

あらぬ

岡野直七郎

加藤洵綾

川島園子

大熊長次郎

今井妙性

高橋城司

隅田葉吉

島木赤彦

宇都野研

尾上柴舟

谷鼎

あらぬ

けものどもおびえ鳴く声とよむらむその島のうちに人はあらぬに③

研究室にゐてひとり飯食むわがこころ世に叛くものの心にはあらぬ①

研究室のはるめきくれば色素瓶にちりたまれるもみにくくはあらぬ②

現実にあらぬ衰骸の夢は見つ木及伊さながらなりしうつしみ③

口腹の欲にかたむくよはひかと思ふ思ひのなくしもあらぬ④

国境に平もあらぬ道ゆきて信濃に入らむ山も怖れず④

国力の背景あらぬ外交の嘆きをいひし陸奥の宗光④

告白すべき思ひにあらぬはかなさよ八つ手葉群に細る陽のいろ⑤

ここに來て間あらぬ兵のてきばきと弾のさなかにわれにもものいふ⑥

ここに^{このしな}して父の見るとはしらざらむ余ねんもあらぬ子が土いぢり①

九品^{げはん}これは下品のためしにも見むと來ませし君にやはあらぬ⑧

心合へる友もあらぬか山寺の青葉にこもり茶を樂しまむ

高橋英子

南原繁

豊島逃水

塚田菁紀

谷鼎

生方たつゑ

谷鼎

浅野詩芸夫

細川白鷗

臼井大翼

與謝野晶子

伊藤左千夫

ころありて吹くにはあらぬ山かぜもそぞろ淋しき旅まくらかな⑤

樋口一葉

心ここにあらぬ空虚さに四月経ぬ爽涼の秋生き返せ吾を⑥

花田比露思

心澄みて言葉となりて湧き出づるその瞬間の稀にしかあらぬ①

津端潔

ころにあらぬ この忙しさの中にゐて 金儲くることを楽しみとせず③西村陽吉

ころにもあらぬいつはりいふ人に戒めてやらむ君がうた誦して

金子薫園

心にもあらぬに人を泣かせつと稲原日和思ひつつ行く①

島木赤彦

ころばへ淋しくなりて私語ささめけり悔あらぬ兵を遂げむと思ふと②

宮柊二

ころ貧しく世に在りて我が得たる幸ゆたけく広く限りあらぬを③

大岡博

ころゆくおぼろ月夜やとひくべき友もあらぬか歌がたりせむ

毛呂清春

五色沼いくつの色をしか呼べど数を知れるもあらぬ沼かな②⑧

與謝野晶子

五十年病み臥ししことあらぬ身をけふ顧みる病室にして④

奥貫信盈

古書うりてかつがつ得にし金とおもへどたちまち虚し笑ひごとにあらぬ①中村正爾

あら—ぬ